

長野県社会福祉士会 NEWS

第183号
2021/3/1



発行▶公益社団法人長野県社会福祉士会
会長 萱津 公子
事務局▶〒380-0836長野市南県町685-2
長野県食糧会館6F
編集▶広報編集委員会
発行部数▶2,400部

TEL▶026-266-0294 FAX▶026-266-0339 E-mail▶info@nacsj.jp HP▶https://nacsj.jp/

コロナ禍における権利擁護支援に

積極的に取り組むためのアピール …… 1

基調報告「コロナ禍における福祉現場の課題」アンケート調査を中心に …… 2

新型コロナウイルス時代の地域ケアを考えるセミナーアンケート …… 3

contents

累犯障がい者・高齢者の支援を

考えるセミナー …… 4～5

特集「社会福祉士としての一日に密着」 …… 6～7

信州ぐるっと!!、役員一斉改選について、編集後記 …… 8

コロナ禍における権利擁護支援に積極的に取り組むためのアピール

新型コロナウイルス感染者数は、本年2月6日現在長野県内では2,329人と発表され、未だ収束が見えない状況が続いています。

本会では、昨年5月に実施した会員に対するアンケートを皮切りに、福祉活動委員会を中心とした追加のアンケート調査や学習会などを企画・実施し、次のような課題を把握してきました。

◇さまざまな状況で生活に困窮する人や、不安や不調を抱える人が増え、家庭内においては虐待やDV、それに準ずる状況に置かれている人が新たに増えていることが懸念されます。

◇外出や交流の機会が制限されることで、自己実現の機会が奪われ、筋力や意欲の低下がおきています。

◇会員も、情報不足や判断基準のない中で事業の中止などの判断に迫られ、面会制限などにより、本人に会えない、話ができない中、退院や施設入所の検討、後見活動などを行っています。

このような状況の中「県民福祉の向上と社会福祉士の専門性の向上」を使命とする私たち長野県社会福祉士会会員は、県民生活の支援と権利擁護を図り、誰もが住みよい社会づくりを目指すため、ソーシャルワーカーとして最善の努力を尽くすことが求められています。

2月7日に開催した「新型コロナウイルス時代の地域ケアを考えるセミナー」では、権利擁護支援の専門職団体として、人々の生活の質の権利を守り続けるため、会員みんなで取り組んでいくことを、参加者の総意として確認するとともに、長野県民にアピールします。

記

- 1 「新型コロナウイルス感染症に対する正しい知識」と「感染拡大予防に関する正しい知識」を得る努力を続けます。
- 2 対象者の権利が阻害されている現状を見逃さず、臨機応変に対応を行う・協議の場を設ける、個性や多様性を重視する判断など、最善の努力を尽くします。
- 3 面会や交流の機会が制限される中、オンラインの活用等「ICT（情報通信技術）」を積極的に取り入れ、新たな生活様式における福祉現場の在り方を真摯に検討します。
- 4 社会的つながりを断たれたままになっている困窮者や子ども、高齢者、障がい者等の存在に目を向け、つながりを分断している現状を変革するべく会員としてできることを問い続けます。
- 5 難局を乗り切るため、会員同士が現状の共有を行い、学び合い、お互いに支え合います。
- 6 長野県内で起きている新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な福祉課題に対し、課題解決のための政策提言や社会活動、学習会等のソーシャルアクションを行います。

2021（令和3）年2月7日

公益社団法人長野県社会福祉士会・新型コロナウイルス時代の地域ケアを考えるセミナー参加者一同

本会では毎年2月に4地区ごとの総会を開催し、事業計画や役員・委員の選出を行っています。今年度はこの地区総会に合わせて、市川一宏先生を招き「新型コロナウイルス時代の地域ケアを考えるセミナー」をZoomオンラインで開催、150人を越えた参加者は最後に上記のアピールを採択しました。関連記事は2～3面をご覧ください。

【基調報告】

「コロナ禍における福祉現場の課題」アンケート調査を中心に

佐藤 もも子（福祉活動委員会・委員長）

アンケート調査等から、判断の基準がない中で判断を迫られる現状や、面会・交流・サービスの利用が制限されることの影響、社会・雇用情勢の変化による生活課題を持つ世帯の浮上などの課題が整理されました。特に中止基準が曖昧で個人の判断に任されていることが多く、現場の葛藤が見えます。時間経過とともに、現場の不安や悩みから、課題や疑問に対して前向きに取り組み、工夫する実践に変化してきました。

＜コロナ禍における現場の気づきと実践＞

○**権利**：不必要な場面で権利を侵害しないこと、護らなければいけない権利は何かを考え、護っていくこと。

○**新たな取り組み**：偏見や差別に対してシトラスリボン運動と連動した福祉教育、高齢者施設にオンラインで若者と高齢者が交流する、直接会えないことに対してDVDを贈る、弁当を届けながら様子を確認、役立つ情報を届ける、写真・手紙を送るなど。

○**生活課題への対応**：従来にない課題を持つ事例の可能性を捉えて、感度を高く持ち把握をする努力をする。

○**地域ケアシステム**：地域毎に弱い立場の人が孤立しないよう、現状に合う仕組みやネットワークを再構築。

○**姿勢**：小さなことでも行動し、価値観の変容に対応し、新たな取り組みや多様性や個別性を要点に実践

○**会員同士の情報共有**：取り組みや実践を具体的に共有、活力を与えあう。

市川一宏氏の提案・アンケート調査への助言

○子どもとひとり親、外国にルーツがある人、病気や障がいがある方などの生活が脅かされている…どうやって各地域の問題として捉えていくか。

○判断基準がないことに対し、ニーズキャッチ・ニーズ評価・サービス提供システムを整理し、判断基準を地域ごと作ってはどうか。

○新たな生活課題を抱える人や世帯が浮上していることの社会への代弁機能が求められる。

○現状は、実績がもっとも説得力のある根拠になる。

○ニーズの共有化、活動目的の明確化のための計画が必要。



人々の権利が脅かされている中、生命・生活の質・人生を護る専門職として実践が問われています。ソーシャルワーカーとして、現状に疑問を持ち続けることが一歩です。

また、価値・倫理・技術・知識・経験を基盤に、新たな発想・感度をもって取り組み続けることと「地域と人々に存在感を示す社会福祉士」を目指し、私たち自身が孤立せず、励まし合い・学び合って乗り越えたいです。

【講演】

「新型コロナウイルス時代における地域ケアを考える」

市川一宏氏（ルーテル学院大学 教授・学術顧問）

地域生活課題では、2025年問題、8050問題、限界集落の増加、子どもの貧困、虐待、ひきこもり、生活困窮などがある。

地域福祉の基本的動向は、生活困窮者自立支援制度の理念として、「相互に支え合う」地域をめざしている。ほか、子どもの貧困対策や社会的養護の体制強化、地域包括ケアシステム、地域共生社会などがキーワードである。

コロナ禍の現状認識では、

○地域における高齢者・家族などの生活課題（外出を控えることでの心身への影響、現状把握がしづらい、つながりが切れている、自殺者の増加など）

○介護事業者・見守り活動などの活動の課題（事業継続の危機、介護従事者の体力・精神的負担、集団感染、活動の再開の難しさ、高齢者にとってサロンは生活の一部）

○生活困窮者の激増（特例貸付申請者の増加、少額年金受給・無年金高齢者の問題など）

長野県社会福祉士会への期待

一本の木を植え続ける努力を！

砂漠の緑化は一本の木から

○長野県の地域福祉実践を丁寧

に振り返り、それらの活動

に「接ぎ木」をしていく発想を進める。

○新型コロナウイルスの広がり、今までの関係を打ち砕き、不安、恐怖、不信、怒りを生みだし、負の連鎖が広がっている。今できることを実践していく。一つひとつ、できることを始めていく。

○改めて、社会福祉士として、「何をしたいか・できるか・求められているか」自分自身に問うてほしい。

○生活の拠点であるコミュニティは、寸断されている。どうコミュニティを再生するか。

○コミュニティの再生に向けた取り組み既存事業・活動の再評価、コロナ禍における新たな支援方法の開拓、新たな協働をスタートするために、今までのネットワークを検証する。



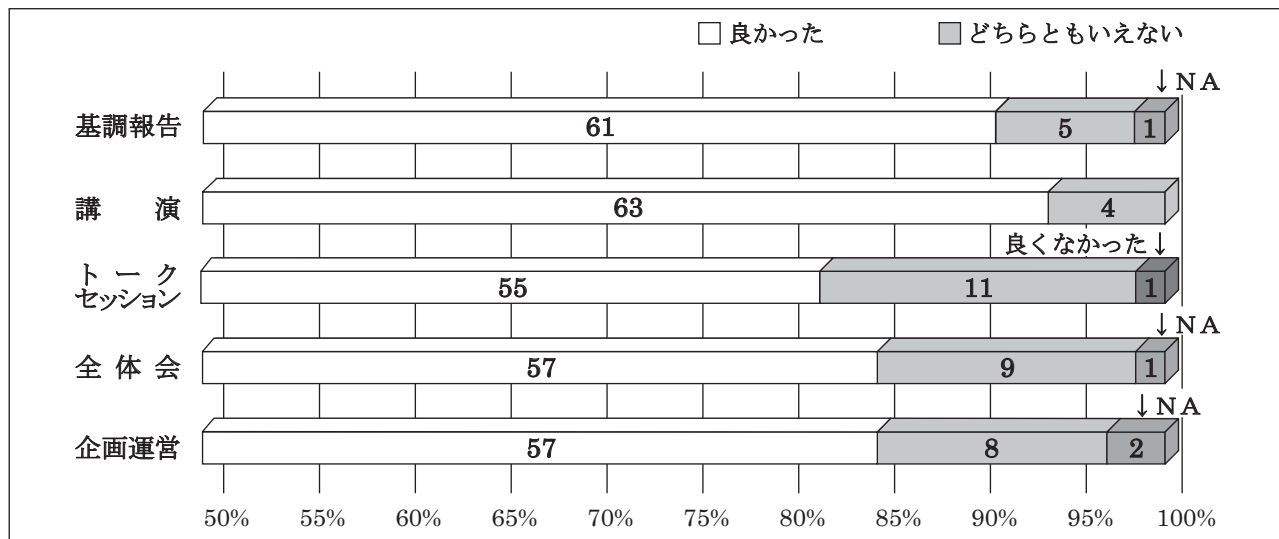
新型コロナウイルス時代の 地域ケアを考えるセミナーアンケート

1 参加者・アンケート回答者について

参加者：153人（東信：38人、北信52人、中信27人、南信36人）
回答者：67人（東信：17人、北信22人、中信16人、南信12人）



2 基調報告、講演、トークセッション①②、全体会①②、企画及運営について



3 参加者からのアンケート

<基調報告を聴いて>

- ◇「社会福祉士会員だからできること・すべきこと」を常に考えていたいと思えた。仲間の前向きな実践が知れた。
- ◇自分だけではなくさまざまな職種の方たちが同じ悩みを抱えていることが知れて良かった。
- ◇同じコロナ禍で、ともに努力していること。
- ◇組織の一人であっても、それを超えて社会福祉士として取り組んでいくこと…の言葉に励まされた。
- ◇判断の基準が、対象者の権利より組織の立場優先になってしまっている。コロナ禍でも、福祉に携わる者として、どこに視点があるべきか問われていると感じた。
- ◇件数的には大規模ではなかったが、コロナ禍における課題を捉えた点で、タイムリーであった。その課題を使い、会員同士のZoom会議ができたことが有効だった。

<講演を聴いて>

- ◇孤独は避けられないが孤立は避けられる。自分たちには何ができるだろうとあらためて考えさせられた。
- ◇コロナ禍での課題を要約してくださったので、まさにそのとおりと思うことがたくさんあった。社会福祉士の言語化を意識していきたい。
- ◇コロナをきっかけに地域の課題がより顕在化している。何をしたいか、何ができるか、何が求められるか
- ◇とにかく、制約的な思考に陥りそうになる中で、「できることから始める」やネットワークの大切さについて改めて考えるきっかけになった。

<今後の抱負>

- ◇俯瞰的にまとめられたアピールだと思う。一人の社会福祉士として具体的に、かつ立場に応じてどのように行動するべきか、を考えて行動する必要がある。
- ◇コロナについても正しく学び、ネットワークをより深め、利用者の方に寄り添っていく。自分自身も健康に過ごしていく。
- ◇コロナの弊害で自分自身がまだ心身を建て直せないでいる。「社会福祉士としてできること」と、もう一度気持ちを奮い立たせ、実行できるようになりたい。
- ◇中期計画のどこに位置付けているのかを意識化するとより良いと感じた。私自身の気づきにもなった。
- ◇自組織でもコロナの予防対策に追われているが、地域にも目を向け、視野を広く持って仕事をしていきたい。
- ◇単発ではなく、こうした課題を各地区で話し合い、共有する場を持てると良いと思う。会員同士のつながりの中で、アピールから実践に結び付けたい。
- ◇身近な足元で、できることから始める。他職種の人達とのつながり（ネットワーク）を拡げる具体的な活動をする。
- ◇正しい知識で、この状況に対面するとともに、職能団体に参加する意義を職員にも伝えつつ、このネットワークを活かしていきたい。
- ◇地域の高齢者福祉の場では、名称独占の社会福祉士は、地域のネットワーク会議において影が薄いため、さまざまな福祉課題に対し、ネットワークの力で存在感をアピールする。

累犯障がい者・高齢者の支援を考えるセミナー

「累犯障がい者・高齢者の支援を考えるセミナー」は、2021年1月15日（金）13時からZoomウェビナーを利用して開催されました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点からWeb参加のみという方法で開催でした。このような条件にもかかわらず、参加申し込みは76人、当日は61人の皆さんの参加がありました。

本セミナーは、現在長野県から受託している再犯防止推進モデル事業（フラップネット）の最終年活動の締めくくりも兼ね、累犯・触法障がい者・高齢者の支援を考えるために開催しました。

<講演>

演題：人は何故薬物依存症になり、
いかにして回復するのか

講師：松本俊彦氏
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所薬物依存研究部 部長
同センター病院薬物依存センター センター長

松本氏は、医師で1990年代後半から依存症に関わっており、今は薬物の依存症の治療と研究をメインに仕事をされている。今回は、日本では覚せい剤が問題になっているが、これを地域で支援する上でどのように考えたら良いのか、どのように理解し支援していったら良いのか、といった点を中心に講演いただいた。



覚せい剤での5年以内の矯正施設への再入率は、他の犯罪に比べ一番高い（49.4%）。再犯の予測因子として、収容期間が長い、入所回数が多い、仮釈放期間が短い、ということがあり、意地悪な見方をすれば刑務所（刑罰）が足を引っ張っている。さらに因子として精神疾患の併存があげられるため、依存症の解決は刑罰ではなく医学的問題だと指摘された。

今まで日本は、回復支援より啓発にお金が使われてきた。つまり、規制強化が中心で回復支援にお金が使われない。規制強化は、コミュニティーをかえって危険にさらす。その例としてアメリカの禁酒法をあげ、禁酒法は良いことはなかったが、これをきっかけに世界で最初の依存症の自助グループができ回復者がでた。

薬物を使うことは「正の強化」（快感の享受）にな

るからといって、一回でも手を出すと依存症になってしまうのか。オーストラリアの研究では、自由に薬を使える状態で依存症になるのは15%という結果もある。

さらに、ネズミの樂園という実験について紹介。16匹のネズミを一匹ずつ個室に閉じ込めた場合と、16匹を一緒の場所に置き、双方に普通の水とモルヒネの入った水を飲めるようにしたとき、個室のネズミはモルヒネ入りの水を好み、一緒の場所に置いたネズミは一匹を除き普通の水を好んだ。さらに、個室に閉じ込めて置いたネズミを一緒の場所に入れたら、普通の水を好むようになった。このことを人間にすべて当てはめるわけにはいかないが、他の人から孤立して息苦しい人やしんどい状況にある人が、「負の強化」（苦痛の緩和）のために依存症になりやすい。依存症の中心には痛みがある。つらい感情、自信のなさ、孤独・孤立、つらい関係など。依存症とは、「安心して人に依存できない」病気。そのため治療や相談から脱落しやすい。

また、治療として依存症集団療法「SMARPP」（スマープ）を紹介。これは平成28年に診療報酬の対象になったが、長野県では駒ヶ根市の心の医療センター「コマープ」、県の精神保健福祉センター「アルプス」という名前で行っている。

医師の守秘義務のもと、「安心・安全」の場での治療。叱られるのではなく褒められる場所であること。使用のメリット・デメリットがあるのだから変えようとするのではなく両性を大切に。罰を与えることは治療中断につながる。ダルクなど医療以外の支援にもつなげることが大切である。

最後に、孤立させない地域社会をつくることや、今の新型コロナウイルス感染症罹患者への偏見や差別と依存症は共通点があることを強調された。

<行政報告>

講師：片岡 洋氏
（長野保護観察所 統括保護観察官）

保護観察所で行っている生活環境調整とは、矯正施設入所者が釈放後に更生に向けた環境で生活できるよう、調査・調整をおこなう手続きをいうとのこと。具体的には入所者から帰住予定地、引受人についての希望を聴取し、地域の保護司に協力を求め、調査・調整し、釈放後の生活に支障がないか確認することです。

しかしながら、矯正施設の中には、適当な帰住地や引受人がなく、福祉の支援を受けないと生活できない者がおり、そのような入所者の帰住調整をおこなう、

特別の生活環境調整を特別調整と呼び、平成21年度から開始されています。

現在行われている特別調整は、矯正施設に収容されている者のうち、高齢または障がいを有する者であって、かつ、適当な帰住予定地がない者に対する特別な手続きのことをいい、特別調整においては地域生活定着支援センターが中心となって福祉施設等の調整を行い、地域の保護司は関与しません。

特別調整の制度では、矯正施設が特別調整候補者を選定し、保護観察所が選定することになっていて、保護観察所が特別調整対象者に選定すると、関係機関に通知するとともに、地域生活定着支援センターに協力依頼を行い実際の調整が開始されます。

なお、長野県では、矯正施設で特別調整候補者が選定されると、保護観察官、地域生活定着支援センター職員で矯正施設を訪問し、候補者と面接し、地域生活定着支援センター職員の意見を聴取した上で可否を判断しており、選定段階から地域生活定着支援センターが深く関与することで、その後の調整が円滑に進めることができ、今後も継続していきます。

また、今後の保護観察所の目標として、現在は特別調整の殆どの釈放者が満期釈放となっていますが、帰

住地が確保され、矯正施設内で改悛の状がある者については、仮釈放の機会を与えられるよう進めたいと思います。

満期釈放者に比べ、仮釈放者の再入所率は極めて低いことが示されており、仮釈放とすることにより、釈放後に保護観察所の関与を強めることができるとのこと。この実現のために保護観察所として、より一層特別調整の充実強化に努めていきたいと思います。

<実践報告>

講師：石川 貴浩氏

(長野県地域生活定着支援センター長)

地域生活定着支援センターの主な業務は次の三つ

- (1) **コーディネート**：矯正施設退所者の住居の確保、福祉サービスの調整。保護観察所からの依頼が原則。
- (2) **フォローアップ**：本人や受入先の依頼に基づき地域生活の定着に向けた支援（期間は原則定着するまで）。
- (3) **相談支援**：出所者、被疑者・被告人段階の支援、福祉関係者・弁護士等から。

事例として、放火・窃盗事犯で服役し地域で支援を継続しているケースの報告があった。本人と接点があった全関係機関に情報収集し、本人の生きづらさを理解し痛みに寄り添いながら支援した事例。支援のポイントとして、希望に合わせた余暇支援、支援会議や面談を多くし孤立感や疎外感を軽減。メンタルフォローとして、精神科通院や鑑別所のカウ



ンセリングを導入。このことにより現在の生活は安定している。

そして、支援から見てくるものとして、安定的な地域生活に向けた環境的な課題を提示。矯正施設には「自由はないが不自由もない」と話す受刑者がいる。ある刑務所では8割が個室でテレビやエアコンが設置されている。また、仕事もある。一方、福祉施設では共同室が多くを占め、仕事も日中の居場所も十分とはいえない。このことは、矯正施設が良すぎるということではなく当たり前と考えるべきで、福祉水準の見直し・底上げこそが必要と指摘した。

その上で、関わるケースの多くは「育ちを剥奪された方」。その本質を理解し尊重を最優先できる支援者と支援チーム体制の構築・協働を目指すことが大切。定着支援センターが目指すのは、最終的に地域において安定した生活を送ることができること。「あなたを待っていました」と迎えてくれる場所が地域にあることは、必ず生きる希望につながり、それは地域にとっての宝にもなるので、そのためには1番に信じぬくことが大切である。立ち直り支援についても、本人のサインを見逃さないこと、そして支援者が決して手を離さないこと。もし再犯しても、機関が連携し途切れない支援を実現していくことが必要と強調した。

新型コロナ感染症対策と地区活動、学習会等の状況について

塩澤 宏之 (理事・北信地区支部長)

北信地区では、令和元年台風第19号災害により地区活動が停滞。活動の再開を目指していた矢先、新型コロナウイルスの感染拡大により、活動は停止の状態が続きました。

理事会において「オンラインを取り入れた活動推進」の方針が示されましたが、長期間の空白によるダメージは大きく、活動の再開は8月にずれ込んでしまいました。

8月以降は毎月、オンラインによる役員会議を開催。10月以降は学習会を再開し、毎回30人以上の会員などに参加をいただき、ようやく活動が軌道に乗り始めました。オンラインの活用により、「地区活動に参加しやすくなった。」という声が多く聞かれます。

運営上の課題はありますが、会員の有無、年代、地区等の枠を超えて、多くの方々が主体的に参加し、一緒に学び、交流する「場」となっています。活動の再開にあたり、多くの会員や関係者などの皆様にご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

改めて「つながり」や「日常・当たり前」の大切さを実感します。オンラインと対面を組み合わせた活動のほか、会員一斉メールやホームページなどによる情報発信にも積極的に取り組んでいきたいと思っています。

今後も自然災害やコロナ禍を踏まえた活動が続きますが、会員の皆様が活動に参加しやすい環境を整えて、会員同士や地域とのつながりがより深まるように、また社会福祉士の価値と専門性がより高まるように、地区全体で活動に取り組んでいきたいと思っています。

社会福祉士としての一日に密着

北信地区

氏名：田村 幸樹
所属：社会福祉法人暖家
職種・業務内容



介護支援専門員（居宅）

地域で暮らす要介護者や家族の生活支援を担う職種として、本人主体で公正、中立な立場で対応しています。

業務でのマストアイテム：メンタルケア

自身のメンタルを整え業務に取り組む事です。

東信地区

氏名：鈴木 由美子
所属：長野大学社会福祉学部
社会福祉学科



職種・業務内容

社会福祉士養成校で、専門及び実習・演習科目を担当しています。ゼミではソーシャルワーカーを目指す学生とともに学んでいます。

業務でのマストアイテム：パソコン、ネット環境（?）

コロナでオンライン授業のためのパソコンスキルと配信環境が必須になりました。

《ある日の私の1日の仕事内容》

時間	業務内容	コメント
出社前	ラジオ体操	10分真剣に取り組むと発汗します
8:00	出社	予定の確認、事前連絡
10:00	訪問	モニタリング、会議など
12:00	休憩	菓子パン、牛乳
13:00	訪問	関係機関訪問等
17:00	帰社、記録、事務	残務、各関係者と連絡、調整
19:00	退社	NHKラジオを聴く
	野球部見学	時々、母校の練習を見学します
	バッティングセンター	動体視力を養い打ち込み、競技復帰にトライしています
帰宅	素振り	体調に必ず

Q1 職歴～社会福祉士の資格をとったきっかけは？

病棟ヘルパー、介護老人保健施設を経て介護保険導入期に居宅ケアマネジャーとして従事しました。支援を通じて自己決定の尊重、残存機能の活用、生活の継続性など、高齢者ケアの基本理念や専門職としての基本的な姿勢、知識、技術向上の研鑽や必要性を痛感したことがきっかけです。

Q2 業務の中で社会福祉士として心掛けていること、大切にしていることは？

利用者の特性、属性を理解し自らの支援が根拠や客観性に基つき、パターナリズムや権利侵害に及ぶ危険性がないか、結果としてなされた決定は誰の何を目的とした結果なのかなど、実践場面でジレンマに陥った時は倫理綱領、行動規範に立ち返るようにしています。

Q3 社会福祉士としてのやりがい？

支援の過程で利用者の行動変容や自己実現、主体的な解決や気づきにつながると、ほっとします。

Q4 これからの目標は？

福祉活動委員の高齢部会員ですがSNSが苦手で、福祉活動委員長に多々負担を掛けてしまったので、少しでも克服することです。

《ある日の私の1日の仕事内容》

時間	業務内容	コメント
出社前	ネコの世話	雑種（15歳）
8:20	出勤	授業資料の確認、教室でパソコンの設定などはじめます
8:50	オンライン授業①	1年生（約160人）のキャリア形成科目。リモートでグループディスカッションも行います
10:30	授業コメント確認	学生が提出したリアクションレポートをチェック。理解度や質問などを確認します
12:00	昼休み	研究室でひとり黙々と食べます（食事摂取時間10～15分）
12:50	オンライン授業②	小テスト配信や途中休憩、映像資料など工夫しています。だいが慣れましたが大変！
14:30	会議資料作成	パソコンにとらめっこ
15:30	メールチェック	学生、学内外から毎日多くのメールを受け取ります。返信が遅くてすみません
16:10	打ち合わせ	社会福祉演習・実習室の教職員と実習先施設のことなど情報共有します
20:30	退勤	疲れた～っ
帰宅	テレビ	ドラマが好きです

Q1 職歴～社会福祉士の資格をとったきっかけは？

社会福祉系の大学を卒業し、医療ソーシャルワーカーとして勤務しました。養成校にいましたので特になにも考えず資格をとりました。当時は社会福祉士ができたばかりで、職業に必須ではない時代でした。

Q2 業務の中で社会福祉士として心掛けていること、大切にしていることは？

現場から離れてしまっているので、実習巡回などでお会いする実習指導者の方々から教えていただく交流の時間を大切にしています。授業では学生と現場をつなぐ役割になれるよう心がけています。

Q3 社会福祉士としてのやりがい？

教員としては、学生の成長を感じたときに感動します。先日ゼミ生から心のこもった言葉をもらって、もう少しで涙が…危なかったです（笑）

Q4 これからの目標は？

「自分の後輩を育成したい」という思いが教員になったときのモチベーションでした。学生からモデルとして見てもらえるようになりたいですし、長野大学4年目で卒業生が現場で活躍を始めましたので、いずれグループスーパービジョンなどできたらいいなあと考えています。

社会福祉士の皆さんは、さまざまな分野で働いています。自分の専門分野以外の業務については知らないことが多いと思います。そこで今回は、それぞれの分野で活躍されている社会福祉士の一日について伺いました。

中信地区

氏名：川上 巧
所属：松本圏域障がい者
総合相談支援センター Wish



職種・業務内容

所長・コーディネーター
松本圏域8市村の委託を受け、地域生活支援事業の障害者相談支援事業を実施しています。
4法人での寄り合い所帯での運営となっています。

業務でのマストアイテム：マスクとアルコール

新型コロナ対策です。収束を願っていますが、しばらくは必須のアイテムになりますね。

《ある日の私の1日の仕事内容》

時間	業務内容	コメント
出社前	家事	弁当づくりとかゴミ出しとか
8:30	メールチェック・朝会	スタッフ全員で予定確認・情報共有
9:00	電話・訪問・来所面談・病院同行・事業所同行・支援会議・関係機関との会議・事例検討・直接支援・内部調整…等	日によってバラバラなので…なかなかコレというベーシックな1日がありません。
12:00	昼食	
	電話・訪問・来所面談・病院同行・事業所同行・支援会議・関係機関との会議・事例検討・直接支援・内部調整…等	しかも、事務所にいないことが多い…ご迷惑をおかけしております。
17:30		各種記録、各種資料作成、などなど
帰宅		

Q1 職歴～社会福祉士の資格をとったきっかけは？

カッコいい事言えなくて申し訳ないんですが、給料アップがきっかけです。学歴も何もなく、異業種からの流入者だったので、資格取得の勉強過程は知らない事をたくさん知ることができて、わりと楽しかったです。

Q2 業務の中で社会福祉士として心掛けていること、大切にしていることは？

「鬼滅の刃」の竈門炭治郎君のようにどんな事情があっても、相手の尊厳や存在は認める。「フルーツバスケット」の本田透さんのようにどんな事情があっても、相手を受け入れ、寄り添う。「うる星やつら」や「こち亀」のような地域や社会における多様性を大事にする。

社会福祉士と関係ないマンガばかりの話ですみません…。

Q3 社会福祉士としてのやりがいは？

なかなか、「はい終わり」とキリの付くことがないので、やりがいはみつけれられないかなあ…。社会福祉士なんて用済みなんて社会が実現したら、逆に感じるのかなあ…。

Q4 これからの目標は？

早寝早起き。健康第一。

南信地区

氏名：北原 葉子
所属：社会福祉法人
伊那市社会福祉協議会



職種・業務内容

地域福祉コーディネーター
地域福祉推進事業、生活支援体制整備事業、まちの縁側事業、子ども家庭応援ネットワーク、赤い羽根共同募金事務局、広報啓発事業の広報番組「きらきら☆ふくし」

業務でのマストアイテム：携帯電話（絶対に必要！）

《ある日の私の1日の仕事内容》

時間	業務内容	コメント
出勤	朝のルーティーン	白湯を飲みながら、ニュース番組を見る車で安全に出社
8:30	出社	職場内環境整備 朝礼にて係内の1日の業務の予定確認
8:40	事務	必ず、朝一番最初に行う業務はメールチェック及び返信
9:00	地域ケア会議	会議資料準備し、地域の課題について話し合う住民会議に参加
11:45	事務	午前中の業務の片づけ、午後の業務の準備
12:00	昼休み	席の近い職員さんと楽しく食事 友人、知人へLINE返信
13:00	広報番組収録	市内のさまざまな場所にて、伊那市社協と伊那ケーブルテレビの共同制作番組収録
16:00	打ち合わせ	福祉教育の打ち合わせのため、学校訪問
17:00	事務	会議録の作成や回覧資料のチェック
17:15	退社	帰る前に職場の方と世間話(´▽`)！ 車で安全に帰宅
帰宅	自己研鑽・テレビ	資格試験勉強、映像研鑽・仲間とミーティング テレビを見ながら、友人、知人とLINE

Q1 職歴～社会福祉士の資格をとったきっかけは？

子どもの頃から、児童会の役を通して、地域の方に助けていただいている実感が強くありました。そんな中、学校の下校時に認知症で家まで帰れなくなってしまった方や、庭で血を流して転倒している高齢者を助けた経験から、「地域の方が困った時に力になれるような人になりたい、今まで支えてもらった分、地域の皆さんの生活を支え、守る仕事に就きたい」と思ったのがきっかけです。

Q2 業務の中で社会福祉士として心掛けていること、大切にしていることは？

「聞く」から「聴く」姿勢で、その方に寄り添いお話を伺う

Q3 社会福祉士としてのやりがいは？

地域の方の辛い時、悲しい時に関わらせていただく中で、事態を一緒に乗り越え、喜んでくださった時です。

Q4 これからの目標は？

職場の方をはじめ、出会う方々と絆を育み、本当にお互いを大切にしあえる関係づくり、そして、地域に住むお一人おひとりに幸せだな～と思える人生を送っていただけよう、願いを見だし、青写真に向かって可能性を取り出すお仕事をしたいです。また、専門能力を高めるため、これまで研修や講座などで研鑽を積んできた経験をより活かせるよう、今年は資格試験に挑戦したいです。

「信州ぐるっと！！ 特色ある福祉活動を紹介」

地域づくりも活動の一環。民間の社会福祉士として

小林 俊之 (株式会社ながの地域福祉サービス)



私の住まいがある長野市の西山、中条地区は10年前に長野市に合併しました。結婚を機に、妻の実家のいわゆるマスオさんとなり17年になります。山間地域特有の課題。高齢化率約53%、地区によっては100%、空き家も増え田んぼも畑も荒れ放題、人より獣が増えるこの地域に、さて民間の社会福祉士として何ができるのか。

民間と言うには理由があります。私自身、介護施設会社の代表でもあります。成年後見も受任。もうひとり、同じ地区の方で公的

には先輩、社会福祉士が長年地域でのかかわりを行っています。

民間の立場での良いところは規制がない分、何でも自由に考えられます。

例えば、会社としては中条地区に看護小規模多機能型居宅介護事業所を開所、空き家があれば自分で調べて紹介してほしいとチラシ配り、そして、同年代の男同士で地域を語り合う、「男！飲み会」も作って4年になりました。

今後は、まだ地域に人がいるうちに、空き家に住んでもらう地域継続を考えたり、例えば小中学校はどうするのかとか、子ども、障がい者、高齢者の安心できる生活（成年後見も）など、とにかく中条地区を盛り上げ、つなげていくことを考えています。

そのためには、地域で行政と民間が連携することで、魅力ある地域にするための生活基盤が必要です。

私自身は、こうあるべきと捉われない活動を小さなところでやっています。

そして社会福祉士活動の幅を広げたいと強く思います。

役員一斉改選について

本会の定款・規則等に基づき、2020年10月30日付けで公示と公募が行われ、全県選出理事候補者に続き、2月7日の地区総会において地区選出理事候補者が選出されました。

各委員会選出理事は、3月中に委員長を互選し選出されます。また、外部理事及び監事の各候補者は理事会で選出されます。

これらの役員候補者は、6月12日開催予定の2021年度定時総会で承認を受けて新執行部体制を確立されます。



<全県選出理事候補者> 3人
上條通夫、長戸桜子、吉澤利政

<地区選出理事候補者> 4人
西澤茂洋、塩澤宏之、田中雄一郎、原智美

<委員会選出理事候補者> 6人

<外部理事・監事候補者> 4人

地区総会では地区の三役18人および委員会委員165人（福祉活動・虐待対応・広報編集・生涯研修センター・ぱあとなあながの・定着支援センター）を選出しました。任期は2021・2022年度です。皆様の活躍が期待されます。



今後の予定

最新の予定は、本会ホームページ (<https://nacs.w.jp>) をご覧ください。

日時(曜日)	事業名・研修名	会場等	備考
3月6日(土)	第6回理事会	オンライン会議	
3月6日(土)	実習指導者座談会	オンライン座談会	

◎ 入会状況 (2021年1月末現在) * 会員数：1,181人 入会率：27.24% 人口10万人あたりの会員数：57.64人

編集後記

オンラインで障害福祉計画・障害児福祉計画学習会に参加した際、講師の三村前会長から「夢を語ろう」という言葉を聞いて、心が温まる素敵な言葉と感じ心に残りました。新型コロナウイルスの対応により緊張が続く毎日で疲れが出る頃だと思いますが、そんな中でも周囲の人たちと夢を語る環境作りをしたいと思っています。人と環境の接点に介入するのが我々社会福祉士の仕事であることを心に刻んで一日一日励みます。(Y.I)